

令和6年度「生活者としての外国人」のための特定のニーズに対応した日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名：特定非営利活動法人つどう場こうべ

1. 事業の概要

事業名称	子育てをしているママ＆パパ（ひとり子育てを含む）のための生涯学習としての日本語教室
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	【本事業で想定する「特定の課題に対する学習ニーズ」（特定のニーズ）を有する主たる対象】 子育てをしているため日本語学習の場に参加できない人や、出産により日本語学習を断念した人を主たる対象とする。 【本事業で想定する「特定の課題」】 神戸市内にはボランティア主体の日本語教室（以下、地域日本語教室）が約25教室と、行政が開催する日本語クラス（以下、行政日本語クラス）がある。そのどちらも神戸市の海岸側（南側）の中央以東に集中している。このような地域日本語教育では、以下のような課題がある。 課題1 託児がある教室がほとんどないため、子どもを連れて行けない。 課題2 住む場所によっては、交通機関を利用せずに行ける日本語学習の場がほとんどない。 課題3 子どもが生まれる前に上記の教室に参加していても、出産後に行けなくなった場合、一人で日本語学習を継続できず断念してしまう人が少なからずいると考えられる。つまり、生涯学習としての視点を持つ学習者オートノミーを育てる支援が行われていない。 課題4 教室の多くが、日本語学習止まりであり、教室の外で日本人との交流がなく、近所にも知り合いがいらないため、地域活動などに参加しにくい。 【本事業で想定する上記の「特定の課題」に対する学習ニーズ（特定のニーズ）】 ① 子育てを優先する生活の中でも日本語学習に集中できる時間が欲しい。 ② ベビーカーや子ども用の荷物があるので交通機関を利用して教室に通うのは困難である。徒歩圏内に日本語学習の場が欲しい。 ③ 家で子どもが寝ているときなどに日本語学習をしようと思うのだが、一人では長続きせず、そもそもどんな教材を使って、どんな日本語を学べばよいかわからないので、それを教えてくれる人が欲しい。 ④ 地域で開催されているイベントに参加したり、公園で子どもを遊ばせたりしたいが、日本語もままならないし、知り合いもいないので参加しにくい。
事業の目的	本事業は、子育て中の親の日本語学習を生涯学習という長期的な視点で捉え、学習

	者オートノミーの育成を目指すとともに、日本語学習が「学ぶ止まり」にならないために、学んだことを使って社会参加するきっかけを作ることとする。 神戸市の地域日本語教育は、40年ほど前からNPO法人や任意団体などが運営する地域日本語教室により支えられてきた。令和5年現在、25ほどの地域日本語教室が活動している。1対1で活動する教室が主流で、日本語学習を中心にしている教室もあれば、居場所としての機能に重きを置く教室もあり、支援内容は多様である。令和元年6月に日本語教育の推進に関する法律が施行されたことにより、神戸市が有資格の日本語教師による日本語クラスを開始したことで、日本語学習を希望する人たちにとっては、学習機会の選択肢が増えた。 しかし、上の日本語学習の場の多くが、神戸市の中央区以東の南側に集中しているため、交通費を負担に感じる人や、時間的に遠方に出向く余裕がないという理由で教室に行くことを断念せざるを得ない人もいる。また、託児がある教室が少ないため、出産により教室をやめる人や、子育て中なので参加できない人もいる。子ども同伴が可能な教室もあるが、子どもがそばにいて学習や交流に集中できないことも多い。 このような状況では、成長に伴う子どもの大事な進路選択時に親がきちんと関われないケースが生じたり、将来子どもが成長したときに「日本語ができない親」を持つことで子どもが引け目を感じたり、ことばのヤングケアラーになることも想像できる。また、子どもは社会で育てていくものである。外国からの移住者たちも地域社会の一員であり、その子どもたちも日本人の子どもたちと同じように社会に育てられる権利を持っている。少しずつでも、また休み休みでも日本語を学び続ける能力である学習者オートノミーの育成と、協働パートナーによる支えが共生社会の実現につながると考える。
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	本事業では、課題解決のために次の取り組みをした。 ◇ 課題1 託児がある教室がほとんどないため、子どもを連れて行けない。 取組：地域住民による託児を設けた。3クラスで14人の学習者が受講しているが、託児を必要とする人はAさん一人だけで、他の人たちの子どもは小学校や幼稚園に通っているため託児を必要としなかった。私たちの経験から、少しでも子どもと離れる時間がほしいだろうと考え、学習とは別に託児室を準備したが、Aさんは自分と同じ部屋で子どもを託児して欲しいと言い、子どももときどきAさんのそばに行って話すことがあった。 先進性：地域住民が託児をすることで、教室終了後でも、地域住民としてのつながりが期待できる。 ◇ 課題2 住む場所によっては、交通機関を利用せずに行ける日本語教室がほとんどない。 取組：今年度は、一年目ということもあり、まずは外国人住民の割合が多い地区で3クラス開催し、どんな人が教室に来るかを観察することにした。同伴する子どもがいない人たちの中には電車で4駅ほどの道のりでも自転

	車で通っている。3歳の子どもがいるAさんは教室から電車で1時間ほどの所から、自家用車で来ていた。その近辺には日本語教室がないことから、Aさんが来日直後に相談に行ったNPOから紹介されて本教室に来た。毎回、駐車料金がかかるため、教室からベビーカーを押して20分ほどかかるスーパーでお買い物をする事で駐車場が無料になる時間帯を利用して教室に来ていた。 今年度は、将来的に地域日本語教室がどうあればよいか、そしてつどう場こうべに何ができるかを考えるための調査の目的もあり、学習者が集まりそうな場所に教室を開いた。学習者たちとどのような教室が良いかを話すうちに、少しずつ私たちがすべきことが見えてきて、12月につどう場こうべの活動拠点を借りることになった。その場所を「らぼ」と名付け、2月から一部のクラスを「らぼ」で開講することにした。 先進性：日本語の授業だけに行く場所では、学習者が社会につながることはできない。日本人等といつでも関わることができて、自分のペースで自分が必要とする日本語を学べる場所が生涯学習としての日本語教育にとっては必要である。そのような場所は神戸市には存在しないので、今度、学習者と一緒に「らぼ」をそのような場所に育てていこうと考えている。 ◇ 課題3 子どもが生まれる前に上記の教室に参加していても、出産後に行けなくなった場合、一人で日本語学習を継続できず断念してしまう人が少なからずいると考えられる。つまり、生涯学習としての視点を持つ学習者オートノミーを育てる支援が行われていない。 取組：1つのクラスで、月1回、一斉アドバイジングをした。本事業で作成したポートフォリオやアドバイザーによる質問を通して、学習者たちが自分の日本語学習について考える時間を取った。 先進性：生涯学習としての日本語教育という視点には学習者オートノミーの育成は欠かせない。地域日本語教育においては、アドバイジングの知識をもつ支援者が少ないことにより、オートノミーの育成が進まない。つどう場こうべでは、アドバイジングができるため、先進性がある。 ◇ 課題4 教室の多くが、日本語学習止まりであり、教室の外で日本人との交流がなく、近所にも知り合いがいないため、地域活動などに参加しにくい。 取組：協働パートナーとの活動の日を作った。 先進性：1回4時間（昼食も含めると5時間）という長時間にわたり居られる場所を設置したことで、学習者たちは回を重ねるごとにリラックスしてきた。居場所としての日本語教育が提唱されながらも、このような取り組みは少ないため先進性が高い。
事業の実施期間	令和6年6月 ～ 令和7年3月 （10か月間）

2. 事業の実施体制

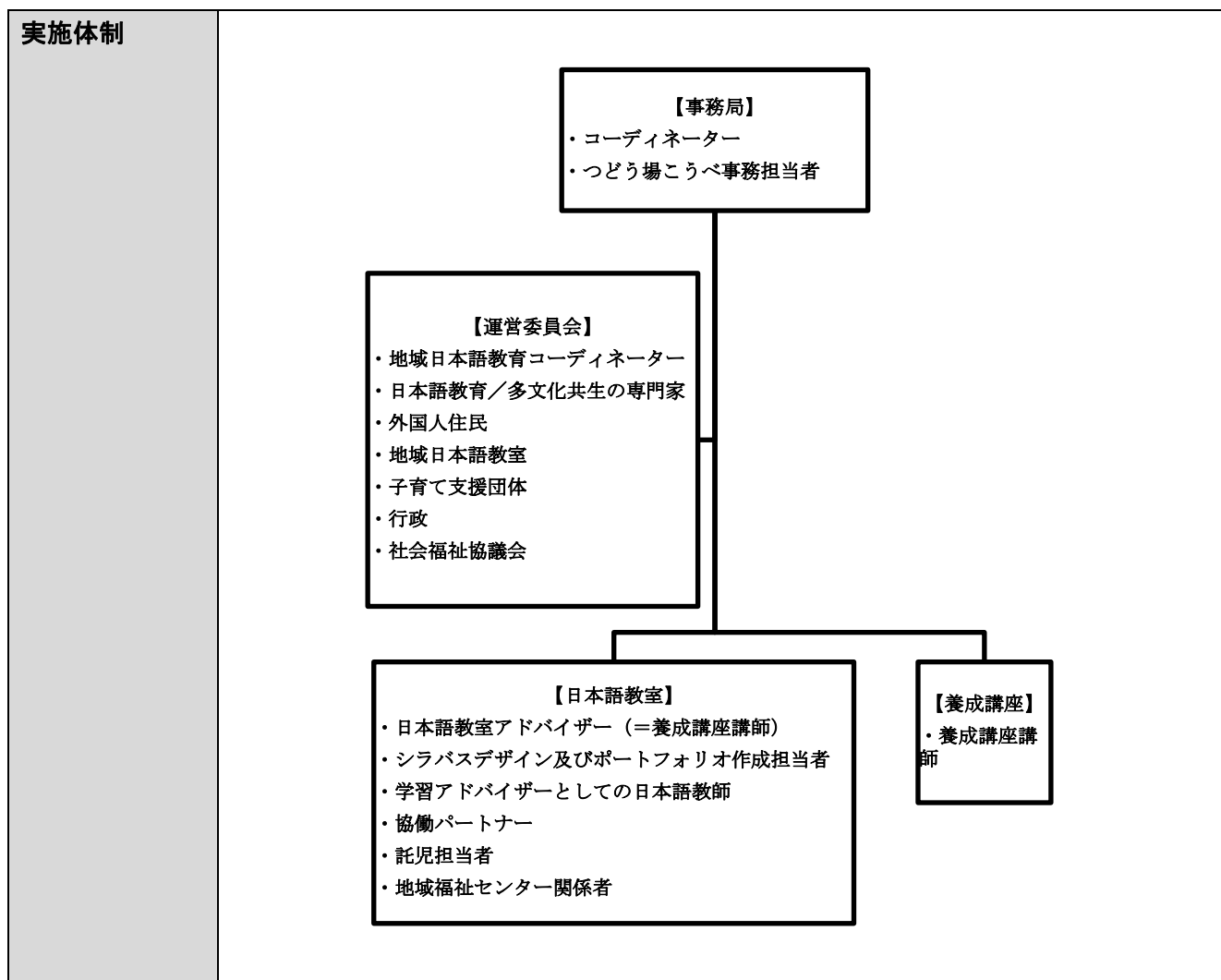
(1) 運営等委員会

実施体制	構成員の人数：9名 構成員の主な属性や専門性： ・日本語教育研究者（元大学教員、現大学教員） 専門分野（多文化共生、地域日本語教育、学習者オートノミーなど） ・子ども・家庭支援コーディネーター ・韓国語講師（韓国語母語話者） ・日本語教員養成に関わる者（大学、420時間養成講座） ・地域日本語教育代表 ・日本語教師 ・行政職員 運営方法： ・年3回、上記運営委員が集まり、事業の進捗状況や今後の取り組みについて意見交換した。また、地域の日本語教育の状況や、外国人住民の現状を情報交換した。 ・年3回の運営委員会だけでは十分なディスカッションが難しいため、運営委員会以外でも、頻繁に会い、そのときどきのホットな情報共有を行った。
------	--

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	・スクールソーシャルワーカー 支援をしている外国人児童の親の中に、社会参加が難しい人が少なくないということから、まずはつどう場こうべの日本語クラスに参加することを目標に掲げて、現在取組中。 ・社会福祉協議会 希少言語の外国人住民などをどこにつないでよいかわからなかったということで、つどう場こうべで対応することとした。今のところ具体的な対応ケースはない。 ・児童館 本事業での日本語クラスが小さい子どもを連れた親を対象にしているため、広報のお願いや、外国人住民の児童館の利用状況などを聞いた。 ・25年ほど活動をしてきたが、昨年4月に閉鎖した日本語教室のボランティアたち ・地域日本語教室
------	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制



3. 各取組の報告

運営等委員会の設置	
【名称：つどう場こうべ特定のみニーズ事業運営委員会】	
取組の目標	外国人住民がどのような生活をしているかを知ること、生涯学習としての日本語教育ですべきヒントを得られることから、日本語教育の視点だけではなく、多角的な視点から外国人住民に関する情報を共有する。
内容	3回の会議は、いずれも2時間の予定で開催した。しかし、第3回目の会議は、初めて対面で行ったということもあり、委員たちは会議終了後もすぐには帰らずに、1時間ほどお茶を飲みながら日本語教育や多文化共生について話をしていた。 第1回 8月23日開催 ・つどう場こうべの紹介 ・事業計画の説明 ・日本語クラスの広報について情報や意見交換をした。

		第2回 3月5日開催 ・ここまでの事業報告と、3月に実施する社会参加の活動について検討 第3回 3月28日開催 ・事業全体の報告 ・今年度の取り組みの振り返りと、生涯学習としての日本語に必要なリソースである「らぼ」の活用について意見交換。	
本取組により検討された事業の方針や特定のニーズに対応した日本語教育の方向性		つどう場こうべが取り組んでいる生涯学習としての日本語教育は、学習者の日本語学習を切り取って考えるのではなく、学習者の生涯を考えた連続性のあるものにしていくための取り組みであり、学習者を同じ地域で共に暮らす住民として捉えることにもつながる。「らぼ」ができたことにより、来年度から本格的な社会参加のための生涯学習としての日本語教育に取り組めると期待する。	
実施期間	令和6年8月23日 から 令和7年3月28日 まで	開催時間・回数	1回2時間 × 3回 = 6時間

特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【名称：生涯学習としての日本語クラス】	
取組の目標	記憶に頼る日本語の知識を得るような学習ではなく、自分が生活する社会に目を向け、自分なりの日本語で自己表現する学習者を育てる。
内容	〔実施内容〕 (1) 日本語クラス ・学習者オートノミーの育成（ポートフォリオの活用） ・生活 Can do を活用したカリキュラムデザインによる日本語学習 ①ママパパクラス（日本語初学者）（託児付き）9月30日～1月22日 毎週水曜日（一部月曜日）13：30～15：30 ・10回、全20時間 ・学習者1名、3歳の子ども同伴 ・中央区文化センターの会議室利用 ②AMクラス（A2レベル）10月2日～2月7日 毎週月水金、10：00～12：00 ・48回、全96時間 ・2月末の学習者10人（延べ出席者数214人） ・中央区文化センターの会議室利用 ③AFクラス（A1レベル）11月7日～3月13日 毎週木曜日 13：30～15：30 ・18回、全36時間

- ・ 3 月末の学習者 3 名（延べ出席者数 30 人）
- ・ 中央区文化センターの会議室利用
- ・ 復習日に協働パートナーが参加し、復習を兼ねた会話練習をした。（全 12 回）
- ・ 協働パートナーは、本事業の養成講座の受講者や、25 年ほど日本語ボランティアとして活動してきた人たちである。
- ・ 4 人の協働パートナーが交替で、1 回の授業に 3 人ずつ入った。

（2）社会参加の活動

- ・ 3 月 4 日～3 月 25 日 毎週火木
10：00～15：00（3 月 20 日のみ 11：00～16：00）
- ・ 7 回、全 29 時間
- ・ AM クラスの学習者を想定して実施（延べ参加学習者数 42 人）
- ・ 日本語クラスの学習者たちから、教室以外で日本人と話す機会がほとんどないと聞き、この活動をすることにした。
- ・ これまで教科書で学んできた学習者たちが、教科書で勉強しても話せるようにならない。生活のいろいろなシーンで日本人と話すことで日本語が上手になる、と言ったことから、この取組を実施することにした。
- ・ 5 人の協働パートナーたちが、1 回 4 人ずつ交代で参加し、学習者たちと活動した。
- ・ 外出も想定していたが、学習者たちは自分の家族のことや、日本にきた理由など、延々と話していた。
- ・ 昼食をとるための時間を設定していたが、学習者たちは協働パートナーたちに近所のスーパーを案内し、一緒に昼食も食べていた。結局、休憩時間はなく、毎回 5 時間みんなで話しをする場となった。
- ・ 協働パートナーと学習者が自由に話せる時間であることから、月水金の教科書を使った学習方法に疑問を持つ C さんが、毎回 10 時から 15 時まで参加していた。
- ・ まだリフォーム中の「らぼ」を手伝ったりする場面も見られた。
- ・ 学習者の一人が、観光目的で来日中のお義母さんを毎回連れてきた。1 か月通ったお義母さんは、協働パートナーたちと少しばかりの日本語だが、積極的にやり取りするようになった。
- ・ 3 月 20 日は、学習者の希望で、近くの山にハイキングに行った。2 組の家族がそれぞれ子どもを連れてきた。一人の息子を持つ D さんは、息子がほかの子どもと中国語で楽しそうに話し、活発に動き回る様子を見て、「うちの子は、引っ込み思案だと思っていました。きょうはとても楽しそう。中国語で話せるからですね。こんなイベントをもっとしてほしい。」と言った。D さんの発言から、日本で子育てをする外国人住民がどのようなことを不安に思っ

	ているか、またそれがどのように解消されるかを垣間見ることができた。このことは、伝統的な教育観の日本語教育からするとここで取り上げることではないと言われるかもしれないが、私たちは、生涯学習としての日本語教育の実践においては、学習者が置かれた環境をも考慮しながらサポートしていくことが肝心であると考えている。									
取組による特定のニーズに対する工夫	わずか 29 時間だけだったが、協働パートナーとの活動を取り入れたことで、教師と学習者という関係ではなく、同じ地域に住む人との対話ができたと感じたのではないかと考えている。									
実施期間	令和 6 年 9 月 30 日 から 令和 7 年 3 月 13 日 まで			授業時間 ・ コマ数		1 回 2 時間 × 回 = 時間				
対象者	日本語学習を希望する人			参加者		総数 人 (受講者 人、指導者・支援者等 人)				
日本語教育の言語技能とレベルについて	①ママパパクラス 聞く話す A1 ②AM クラス 聞く話す A2～B1 ③AF クラス 聞く話す A1									
日本語教育の対象とする生活上の行為について	・ 近所の人とやり取り ・ 友人宅への訪問 ・ 自分の体調に関すること（病院） ・ 緊急時の対応（救急、警察）									
使用した教材・リソース	①ママパパクラス ・ 生活 Can do をもとに、担当教師が作成したイラストなど ②AM クラス ・ 『Try! N3』を使っていたクラスにママパパクラスのチラシを見た子育て中の人たちが参加し始めたことにより、文法的なことに重きを置くのではなく、教師が作成したイラストを中心に授業をしている。 ③AF クラス ・ 『Try! N4』を使っていたクラスにママパパクラスのチラシを見た子育て中の人たちが参加し始めたことにより、文法的なことに重きを置くのではなく、教師が作成したイラストを中心に授業をしている。									
受講者の出身（ルーツ）・国	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	10	1								

別内訳 (人)	アメリカ(1名) カナダ(1名) オーストラリア(1名)
------------	------------------------------

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

AM クラスの様子

【第48回 令和7年2月7日】

このクラスでは、学習者同士が話す時間を大切にしている。学習者間の媒介語が中国語であるため、ときどき中国語も飛び交うが、最近では全員がすぐに日本語に戻そうとする様子が見られるようになった。



取組事例②

協働パートナーとの活動

【第7回 令和7年3月25日】

春休みのため、子どもを連れた家族も参加した。本事業の養成講座を受講した協働パートナーが学習者に対応している。



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

・学習者オートノミーが育ち始めた。

月初めにアドバイジングを実施している AM クラスでは、アドバイジングを始めて 2 か月ほど経った頃から、学習者たちから日本語の学び方に関する話題が出るようになった。家をリフォームした T さんは、「私はリフォームの日本人と話していたので、リフォームのことばをたくさん覚えました。床、天井、ダウンライト、コンセント(笑)」と得意そうにそれぞれの箇所を指さしながら言った。T さんは、教科書で勉強しても話せない。たくさん日本人と話せば上手になる、と言った。T さんは、自分が日本語を習得する過程を観察するようになった。

(3) 今後の改善点について

・生活者としての学習者は、仕事や家族のことが理由で、教室を休みがちである。無断欠席する人はいないので、学習意欲がないわけではない。このような人が、教室以外の場所でも日本語学習につながる行動をとれるよう、今後はアドバイジングの実施時期や回数について考えていきたい。

取組の成果の発信			
【名称：つどう場こうべ、始動！】			
取組の目標	設立間もない本団体の取り組みを周知し、本団体が核として取り組む生涯学習としての日本語教育について、本事業を活用した実践を紹介する。ポスター発表という性質を利用し、その場にいる人たちとディスカッションすることで、今後の実践を改善する機会とする。		
内容	日本語教育学会の「2024 地域発信 in 関西」でポスター発表をした。 このコーナーは、会員でなくても参加できるため、過去に開催した際には、地域日本語教育に関わるボランティアたちの参加もあったことから、研究者だけではなく、実践者たちにも本事業の取り組みを紹介する機会となった。 日時：令和 6 年 11 月 17 日 12:10～13:20 場所：姫路市市民会館 発表タイトル：つどう場こうべ、始動！ 発表者：尾形文、山田泉、大河内瞳、瀬井陽子（いずれも本団体の正会員） 当日は、尾形と山田が発表した。 発表内容：尾形から設立間もない団体の紹介をしたあと、山田から本団体の核となる取り組みである生涯学習としての日本語教育について、文科省から委託された取り組みを紹介した。		
取組による特定のニーズに対する工夫	本事業で実施したママパパ支援のための養成講座の具体的な内容や、生涯学習としての日本語教育への取り組みを伝えた。		
実施日	令和 6 年 11 月 17 日	時間数	1 回 0.5 時間×1 回 =0.5 時間

対象者	日本語教育学会参加者、会員 以外の地域日本語教育に関わ る人たち	参加者	総数 20 人
-----	--	-----	---------

(1) 特徴的な活動風景

2024年度日本語教育学会秋季大会@福岡
2024地域発信in 福岡 「増える外国ルーツの市民 ― 近畿における共生のあり方 ―」
つどう場こうべ始動！
特定非営利活動法人つどう場こうべ
尾形文/大河内穂/瀬井陽子
tsudoubakoube@gmail.com

つどう場こうべ とは？
2024年3月28日設立
全員が日本語教育関係者という
画一的な集まりに見える…が…

立ち上げメンバー
地域日本語教育ボランティア 日本語教師
日本語教員養成教員 日本語教育研究者
日本語教育コーディネーター

多様な経験を持つメンバー
専業主婦 海外生活 子育て
国際結婚 放送記者 電機設計
行政外研団体勤務 児童会活動教

性別 世代

会費は
「みんなどこかでマイノリティ」
つどう場こうべでは—
マイノリティを、「少数派」ではなく「社会的弱者」(山田康)
マジョリティを、気づかずにいられる人/気づいていないでいられる人(ケイン樹実)
つどう場こうべが目指す社会は—
自分自身が苦しかったとることを思い出し、辛そうにしている人に気づき、
助け合える社会、生き心地の良い社会

つどう場こうべの活動
次の二本柱で活動

1 日本語教育の質の向上
(1) つどう場こうべ日本語教師養成講座 (文化庁届出受理番号: R06012628006)
登録日本語教員の資格取得に係る経過措置における日本語教員養成講座
(養成する教員)
●従来の日本語教育の知見の上に、自らの社会分析の下に新たな知見を加えることができる教員
●よりよい社会関係のために学習者および受け入れ社会側にも相応の思考の必要性を認識できる教員
(2) 社会参加のための日本語学習を支える人を養成する講座 9月実施
(文部科学省およびかめり財団の助成にて実施)
(3) 日本語ボランティア養成講座
●文部科学省およびかめり財団の助成にて実施 (依頼団体と相談中)

2 生涯学習としての日本語教育
(継続的な日本語学習支援の必要性)
●自己実現に向けて日本語を学ぶ人々が学習目標とする日本語は、そのときどきのライフコースによって変化するため、継続的な日本語学習支援が必要である。
(社会参加につながる学習支援)
●社会参加を視野に入れた日本語学習支援をするために、教室だけの学び止まりで終わらないよう自律学習を促進する。
(各種日本語クラスを開設中)
(1) ママバイクラス (送迎付きクラス) 10月～現在
(文部科学省およびかめり財団の助成にて実施、社会福祉協議会と連携)
(2) JLPT 8 コミュニケーションのクラス (就労を視野に入れたクラス) 6月～現在
(一橋、神戸学院の協賛で実施)
(3) 留学のための事前学習 (日本語のための150時間クラス) 10月～現在
(イランとのオンラインクラスを実施中)
(4) 子どものための日本語クラス (企画中)

【参考文献】
・ケイン樹実 (2018) 「note」 <https://note.com/julianote/n/n1a83b80758cc>
・山田康 (2022) 「日本社会のグローバル化と多文化共生の課題」 「地域での日本語活動を考える」 ココ出版、p263



任意の取組 人材育成のための養成講座			
【名称：社会参加のための日本語学習を支える人を養成講座（通称：ママパパ支援講座）】			
取組の目標		子育て中の日本語学習者の社会参加を支えるアドバイジングができる講師やボランティアを養成する。	
内容		取組4 人材の育成 タイトル：社会参加のための日本語学習を支える人を養成講座講座 通称・・・ママパパ支援の養成講座 時間数：1回3時間で5回（ハイブリッド） 場所：神戸市中央区文化センター 内容： 第1部 1日目 9月9日 13：00～16：00 （尾形文） ・生涯学習ってなに？ 学習者オートノミーってなに？ ・社会文化的文脈から学習を考えよう！ 2日目 9月10日 13：00～16：00 （脇阪真彩子） ・学習方法や学習リソースを知る ・教科書だけが教材じゃないよ！ 3日目 9月11日 13：00～16：00 （尾形文） ・日本語学習の目的を考えよう！ ・社会参加のための日本語支援とは？＝教室止まりにならない日本語支援 ・協働パートナーってどんな人？ 第2部 4日目 9月12日 13：00～16：00 （瀬井陽子） ・学習アドバイザーとしての実践（導入） 5日目 9月17日 13：00～16：00 （瀬井陽子） ・ポートフォリオって何？身近なものから考えよう！	
取組による特定のニーズに対する工夫		本講座は、3人の講師が過去に実践した講座を、ママパパ支援の特化した内容に変えたものである。受講者たちからの感想から、対象の学習者を特定することで、受講者たちには理解しやすい講座になったようだ。	
実施期間	令和6年9月9日 から 令和6年9月17日 まで	時間数	1回3時間 × 5回 =15時間
対象者	日本語教師、日本語ボランティア	参加者	総数 12人

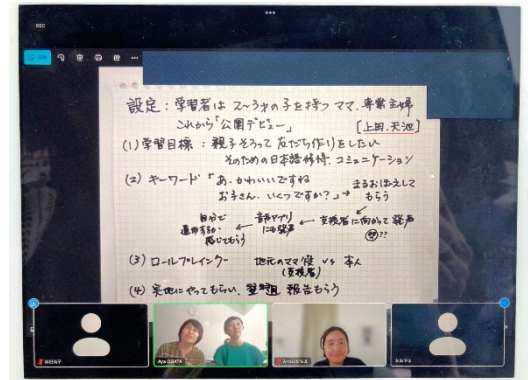
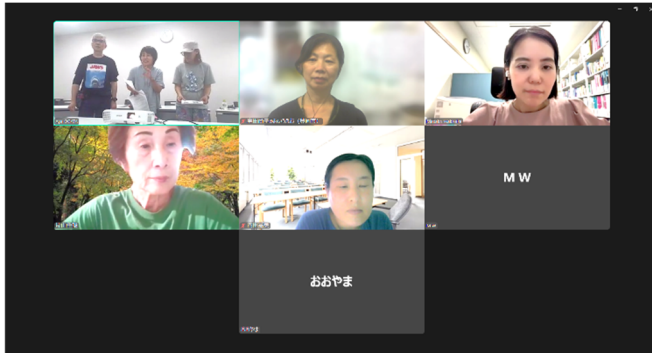
(1) 特徴的な活動風景 (2～3 回分)

取組事例①

【第4回 令和6年9月12日】

・学習アドバイザーとしての実践 (導入)

学習アドバイザーの役割を学んだあと、グループで1回のアドバイジングを想定した活動話し合っ
て、発表した。



取組事例②

【第5回 令和6年9月17日】

・ポートフォリオってなに？

ハイブリッドのため、オンライン受講者とオフライン受講者の交流を意識した活動を行った。



(2) 目標の達成状況・成果 (取組による特定のニーズの充足)

本講座は、生涯学習としての日本語教育を知るために、まずは、日本語教育のパラダイムシフトについて話した。日本語教室のコーディネーターから、これまで、「日本語を教えるならこの本よ、と言って『みんなの日本語』を渡されたかと思うと、何年か経って、日本語教室のボランティアたちは会話中心の活動をしてね、と言われ、何が何だかわからなかった。でも、日本語教育のパラダイムの流れがわかったことで、今後どうすればいいかが少しだけ見えてきた。」という感想をいただいた。

私たちは、うわべだけの方法を変えるだけでは生涯学習としての日本語教育の実践にはつながらない
と思い、日本語教育のパラダイムシフトを広めようと考えている。その意味で、今回は効果があった。

(3) 今後の改善点について

本講座は、学習観や教育観について話したり、学習アドバイジングという専門的なことにも挑戦するため、ボランティアだけでなく、これまで文型積み上げの方法で授業をしてきた日本語教師たちにも難しいということがわかった。伝えたいことを変えずに、受講者たちが理解しやすい講座を考えてきたい。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

子育て中の親の日本語学習を生涯学習という長期的な視点で捉え、学習者オートノミーの育成を目指すとともに、日本語学習が「学ぶ止まり」にならないために、学んだことを使って社会参加するきっかけを作ることを目的とする。親自身の自己実現のためだけではなく、「日本語ができない親」を持つことで引け目を感じる子どもやことばのヤングケアラーを作らないためには、親はどうすればよいかを学習者自身が考えるための教室でもある。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

- (1) 学習者オートノミーの育成
- (2) (1) をするためのポートフォリオの作成
- (3) Can do を活用したタスクベースの授業
- (4) 対象をママパパに絞った支援方法を考える養成講座

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

- (1) 学習者オートノミーの育成
定期的に学習アドバイジングを実施するのは、つどう場こうべでは初めての取り組みだった。上述したように予想以上に効果があったので、今後も継続する。
- (2) (1) をするためのポートフォリオ
ポートフォリオの後半をクラスによって変更したものを作成した。前半部分に文字が多いため、学習者がとっつきにくいように思える。もっと見た目に楽しそうなポートフォリオに改訂する。
- (3) Can do を活用したタスクベースの授業
つどう場こうべでは、初めての取り組みだったため、教師がタスクベースの授業に慣れておらず、Can do をどのように使うかがわからないようだった。今後は、勉強会をするなどする必要がある。
- (4) 対象をママパパに絞った支援方法を考える養成講座
受講者たちからは、新しい発見があったという感想が多かったことから、じょじょに日本語教師やボランティアの意識を変えていけるのではないかと考えている

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

・スクールソーシャルワーカー

今のところ教室参加は実現していないが、スクールソーシャルワーカーが抱えるケースに日本語教育が役に立つかもしれない。一つのケースが成功すれば、今後は、社会参加が難しい人たちへの日本語サポートが可能になるかもしれない。このように日本語教育以外の方々と連携することで、潜在的学習者につながると考えている。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

団体を設立して間もないことから、周りへの周知の方法が手薄であることを実感した。今後は、スタッフ間でアイデアを出し合いながら、広報の方法を考えていきたい。

事業成果の発信についても、今年度は、思うように実施できなかった。今年一年でそれなりの実践に取り組んできたので、次年度は、具体的な方法を含めて、いくつかの方法で発信していきたい。

(6) 今回のプログラム実施を通して得られた知見やノウハウ

・つどう場こうべでは、日本語学習だけの場ではなく、仲間が集まる場所としてクラスを開催しており、何でも気軽に話せる場所としている。そのため、学習者たちからつどう場こうべがどうあってほしいかという意見をもらうことが多い。教室は社会そのものであるといわれるが、私たち教師と学習者とのやり取りは、まさに生きた日本語を使う社会そのものである。

(7) 改善点、今後の課題について

AM クラスでは教科書を使用していたが、来年度から教科書はやめて、Can do シラバスに移行する。それにより、学習者にとっては自分が必要とする日本語に近い学習ができる。しかし、教師たちがタスク型の授業ができないという課題が残る。